

青年期以降の聴覚障害者の自尊感情に関する調査

教育デザインコース 特別支援教育領域

湯浅 遼太

1. はじめに

現在、多くの聴覚障害者が社会適応上の問題を抱えている。厚生労働省は、過去 30 年間に転職した聴覚障害者の割合が全体の約 4 割であることを報告している(2015)。聴覚障害がある青年の社会適応の成否には、自尊感情の発達が大きく影響することが分かっている(Marschark, 1978)。しかし、ろう学校と普通学校、それぞれの教育の場の違いが聴覚障害者の自尊感情の発達に与える影響は明らかにされていない。

本研究では、ろう学校または普通学校、それぞれの学校で学んだ聴覚障害者の自尊感情と自尊感情安定度を調査し、教育の場の違いにより、差異があるかどうか、あるとしたらどのような様相を示すかを明らかにする。

2. 方法

18 歳以上の聴覚障害のある男女 28 名を対象にアンケート調査を行った。質問は、個人属性(性別、年層、障害等級、ろう学校に通った経験の有無、等)に、自尊感情尺度(内田ら, 2010)、自尊感情安定尺度(中澤, 2010)を合わせた 36 項目から構成されている。個人属性を除く質問への回答は 5 件法で求めた。ほか、ろう学校および普通学校に通う長所と短所について任意の記述回答を求めた。使用した調査用紙は横浜国立大学研究推進機構による倫理認定を受けている。

収集したデータは、まず尺度ごとの因子構造を検討するために、因子分析(主因子法・Promax 回転)を行った。いずれの因子にも負荷量.40 以上または負荷量.40 未満であった質問項目を削除したのち、因子を再構築し、Cronbach の α 係数を算出した。つぎに、対応のない t 検定を行い、再構築した各因子の基本統計量(平均、標準偏差)とろう学校に通った経験の有無の間の相関係数を調べた。これと並行して、記述項目については、KJ 法に準じた内容分析を行った。

3. 結果

尺度ごとに因子分析を行い、質問項目の削除を行った結果、自尊感情度は 1 因子 8 項目、自尊感情安定度は 2 因子(不安的側面、否定的側面) 18 項目が抽出された。Cronbach の α 係数はいずれの因子も .71~.87 の値を示した。

ろう学校に通った経験がある群(n=12)は、そうでない群(n=16)と比して、自尊感情において 0.26 低い数値を、自尊感情安定度の不安的側面(将来の展望や自身の素質素養に対する不安)において 0.13 高い数値を、自尊感情安定度の否定的側面(自己に対する否定意識)においては 0.52 高い数値を示した。自尊感情、自尊感情安定度のいずれの因子においても、ろう学校に通った経験のない群が良好な結果を示した。t 検定の結果、各因子の基本統計量とろう学校に通った経験の有無の間に有意差はみられなかった。

4. 考察

今回の調査では、有意差を認めうるだけの母数を確保することができなかったため、統計データの解釈は記述データと重ね合わせながら進める。

ろう学校に通った経験のない聴覚障害者が、通った経験のある聴覚障害者と比して自尊感情が高く、自尊感情安定度の否定的側面が低下している要因として、「担任・クラスメイトの無理解の中で育まれた忍耐力」「健聴の世界での対応力」の存在が伺える。一方で、自尊感情安定度の不安的側面においては、他項目と比べて 2 群間の数値の差異が小さい。将来の展望や自身の能力に対する肯定感情の未発達は、教育の場による影響ではなく、聴こえなさそのものに起因する 2 群共通の心理社会的な問題である可能性が浮かび上がる。

今後の課題として、聴覚障害者の自尊感情ならびに自尊感情安定度の発達と、学校生活におけるソーシャルスキル獲得機会が、どの程度、関連しあっているかについて更なる検証が求められる。